

続いた。

家へは金三十五円と七つボタンの服一着と乾パン少々出したら母は泣いていたが、体一つでもと無事を喜んだのである。そして子供たちは、五年の歳月で忘れていたか、私のそばへはだれも来なかった。

ある日、警察の人が私服で来て、いろいろの話を聞かせてくれと言ってきた。最初のうちはいい気になってシベリアの話をしていたら、その後三回も同じ人が一人で来たので、用があれば警察でもどこでも行くから家へは余り来ないでくれと断った。たびたび警察から来られると近所の手前もあるからである。それから来なかったが、捕虜の調査ではなく思想調査であつて、私は無性に腹が立った。

後日、県の援護課から引揚げの調査用紙が送られてきた。その中の死亡者の欄に清野君と大阪の若者のことを書いたが、大阪の若者については、名前も住所も聞いてなかったので書きようがなかった。

私は長いシベリアの抑留から解放され、敗戦後大混

乱の故国にようやくたどり着いたことを痛感した。

我々ソ連に抑留された者 五十七万五千人

病氣などで送還された者 四万六千人

ソ連内で死亡した者 五万五千人

昭和三十年年度まで引揚者数 四十六万四千人

ソ連国内の日本人収容ラーゲル数 八百五十五地区

私どものラーゲルは、チタ第二十四地区という。その二十四地区内にも、大小、また山小屋式まで無数に点在した。そして伐採部隊であつた。

なお、各地区ラーゲルでは、作業内容は全部違つていたのである。

シベリア抑留記

岐阜県 伊藤 武

シベリア連行

昭和二十年八月十七日、中国の開原でソ連軍と八路軍により武装解除を受け、肩章も外され部隊組替えを

受けた私たち日本兵は、開原でのパルプ工場の解体作業が無事終了したら日本へ帰国できると信じていた。

十月に解体作業が終わわり、全員が新京に移され、冬季用被服も支給され、いよいよ帰国できると期待していた。しかし、現実はそのなにかはなかった。

昭和二十年十一月八日、集めた私物の数々を持てる範囲でいっぱい背負って、新京から有蓋列車に乗り込んだ。

「急げ、急げ（ダバイ、ダバイ）」とソ連兵士にせかされながら乗った列車は、南下するどころか逆に北上を開始した。

「これはおかしい。約束が違う」と騒ぎ出したころには列車は速度を増し、さらに車両間に自動小銃（マンドリン）を構えたソ連兵がいつの間にか乗り合わせ監視に就いていた。列車の速度が落ちたときに、列車の扉を開け飛び降りて逃げ出した者もあるが、すぐに発見され、数カ所から一斉に狙撃され皆殺されてしまった。「何とかしなければ」と考えているうちに、列車はどんどん北上して、哈爾濱（ハルビン）を通過し、

齐齐哈尔（チチハル）を過ぎ草原の荒野を進むが、行き先は依然として不明で、不安ばかりが募る。

私たちの乗せられた有蓋列車は、ほぼ中央の位置左右に鉄製の引戸式扉がついていた。その扉を開けて中に入ると、その左右、つまり進行方向の前後に木製の棚が作られていて、上下二段に分けられていた。同一車両に乗車した三十名は、各自が持ち込んだ荷物を中央の扉と扉の間の空間にまとめて積み上げ、前後にしたらえてある上下二段の棚にお互いに詰め合せて体を横たえた。

落ち着いて車両の内部を見ると、天井近くの前後二箇所に長方形のわずかな格子窓があり、それが空気孔であると同時に、明かり取りの役目も果たしていることが分かった。さらに車両の底部の一隅に十×三十七センチの穴があり、これは列車の走行中に大小便をするための便所として使用でき、排泄物は終了後木片で外に押し出した。停車したときに扉を開いてもらい、列車近くの外で排便をするように努めたが、走行中はその穴便所を使用した。

現在考えてみると、これは当時の家畜用運搬車で、その中に木の柵を即製に造りつけ、最初は金持ちのユダヤ系ポーランド人をシベリアに送り、次いでレニングラード（現在のサンクトペテルブルク）で捕虜にとつたドイツ兵をまたシベリアに送り、最後に私たち日本兵を満州からシベリアに輸送したのだ。

十一月十一日、国境の町、満州里（マンチュウリ）を通過した後、列車はしばらく停車していた。夜の訪れとともに発車したが、動き出した列車の空気窓から外を眺めていた一人が、「おい、鉄条網が見えるぞ！」と叫んだ。別の者が急いで他の窓から外を覗いたが、かすかな明かりの中では何も見えなかつたらしい。国境を見せないために、夜間を待つて通過したのである。国境を越えソ連領に入ったことは間違いなさそうである。

夜が明けて外を眺めると、大草原が続いている。午前十時ころであるうか。急に列車が停車し、扉が開けられた。多数の厚着をした女たちがパンを手にとって扉の前に立っており、他の物との交換を望んでいるら

しい。言葉が通じないが手真似で判断して、車両の真ん中に置いてある自分の荷物から適当な物を選び出して、パンとうまく交換する者もいた。ここがどこか知りたくて駅の名前を尋ねると、「ボルジャ」と聞こえた。やがて列車はゆっくり動き出し、かなり走つて午後三時ごろオロビヤンナヤにも同様にして止まり、夜になって大きな町に入り、やがて止まつた。

「全員持ち物を持って下車せよ」という号令で、列車に持ち込んだ荷物を持って飛び降りると、膝下くらいまで雪が積もっている。プラットホームはなく、どうも引込線の上らしい。雪明かりでしか周囲が見えないが、ゆっくり見回す時間もなく、ソ連兵が「急げ、急げ（ダバイ、ダバイ）」と叫ぶので、皆の後に従つて線路上を横切り、列車の進行方向に向かつて歩き始めた。

「今夜はどこで泊まるのかな」などと考えるが、説明が全くないので、一列になってひたすら黙々と進むだけである。所々に自動小銃（マンドリン）を持ったソ連兵が立っていて、手で歩く方向を示す。まもなく、

緩い上り坂の道に出た。民家に明かりは見られるものの、人通りが全くなく、寒さが身にしみ始めた通りを無言のまま歩き続けた。ここはどうも「チタ」という町らしいと、前を行く者が歩きながら教えてくれた。

「シベリアのチタ」へ連行されたのだな、と自らに言い聞かす。

どちらの方向に歩いているのか、それさえ分からなく、ただ前の者の後ろに遅れないようについていくだけである。どれくらい時間が経ったのであろうか。人家が見えなくなつてすでに久しいが、大木が立ち込め、真つ暗な林の中に入つてきた。やがて「休憩」という声が前方から伝わつてきて、雪の上に腰を下ろした。

外気の冷たさに雪の冷たさが加わり、汗の滲んだ肌は急速に冷え、耐えきれず立ち上がらざるをえない。しばらく休憩の後、これまでと同様三時間くらい歩いては一時間休憩するという状態が繰り返され、昼夜の区別なく歩き続けた。夜だから眠るとか定時に食事を取るといった常識的なことには全く配慮されなくて、腹が減れば各自が携えている食物を歩きながらあるい

は休憩のときにかじるように少し食べ、喉が渴けば手袋をはめたままの手で周囲にある雪をすくい上げて口に運び、ゆつくり飲み下すだけであつた。

睡眠は休憩時に目をつむるだけであつた。私物を沢山持つてのこんな行軍は大変な体力の消耗を来す。多くの荷物を持つ者は、耐え切れずに不要と思われる物を捨て始めた。部落もなく、日中といえども人に会うこともなく、ひたすら赤松林の山道を奥へ奥へと進む。

二日目からは、夜間の休憩が数時間続き、日中はほとんど休まないで歩き続け、わずかな休憩時間に持ち物の中から食物を出して食べ、周囲の雪を口に含み、そして人目を憚るようにして隊列から見える場所ですれ違った。

三日目の夕方、ようやくにして、森林を切り払つた場所に数棟の丸太小屋を見た。その周囲は鉄条網で二重に囲まれ、四隅には高い監視用望楼が備えられている。ようやく目的地に着いたらしい。

不眠不休に近い状態でろくに食べ物もなく歩き続けたために、まず横になつて眠りたいだけであつて、話

をするのも嫌だった。ここはシャバルトイという土地であると、何日も後に教えられた。

シャバルトイの丸太小屋は収容面積が少なく、中に入れない者が多数出たが、私は幸いに一番北側に位置する第一兵舎の北側下段に割り当てられ、その夜は室内で横になってぐっすり休むことができた。全体としては多人数過ぎて、半数近くの二百名が戸外の雪の上で野宿することになった。いくらテントを張り毛布を重ねて敷いても零下十度の戸外は寒く、やがて数日後に、その二百名は近藤大尉に引率されて余所に移動して行った。行き先がどこであったのかは、今もって全く分からない。

後になって聞いたところでは、私たちが入ったシャバルトイの捕虜収容所はドイツ人の捕虜収容所であったらしく、先住者が使ったと思われる飯盒、フライパンなどが落ちており、それらにドイツ文字が記されていたという。

シャバルトイ捕虜収容所

シャバルトイ捕虜収容所の正式名は、第五二捕虜収

容所第一〇分所といい、二重の鉄条網と木柵で囲まれた東西七十メートル、南北百十メートルの規模で、南側に少し傾いた傾斜地にあった。

東側のやや南にある衛兵のいる入口を入ると、四棟の平屋建て兵舎が見られる。それらのうち一棟だけは、入口を右に折れるとすぐ突き当たり、そこから東側の木柵に並行に北に向かう細長い建物で、第四兵舎と呼んだ。他の三棟は、それぞれの建物の入口を第四兵舎に向け、東西に長く伸びる建物で、北側から順に第一兵舎、第二兵舎、そして第三兵舎と呼ばれていた。

これらの兵舎の入口は二重の外開きの扉で、扉と扉の間に少しの空間があり、寒さを防ぐように工夫してある。内側の扉を開いて中に入ると、部屋の床部分は土中に斜めに下り、周囲の大地よりは一メートルくらい掘り下げられた半地下式であった。細長い建物の真ん中が通路になっていて、その両側は丸太で作られた二段の蚕棚の状態である。そして屋根棟の部分には丸太が並べられた天井があり、細長い兵舎のほぼ真ん中の壁側部分だけは、明かり取りのための二重のガラス

窓がはめ込まれていた。ちょうどその位置にはダルマ型の薪ストーブが据えつけてあって、夜間交代で薪をたき、暖を取った。

便所は兵舎から百メートルほど離れた南西にあった。兵舎から相当離れているので、行くのに寒い思いをした。しかもその便所は、大地に幅二メートル、長さ五メートル、そして深さ二メートルの穴を掘り、その上に股幅だけの横木を二本ずつ渡しただけのもので、凍ったときなど少しバランスを失うと下に落ちることもあった。屋根はなく、周囲に空き袋を吊るして目隠しにしていた。落し紙の支給がなかったので、マホルカ（タバコ）の巻き紙を代用とした。

そのほかに本部詰所、医務室、風呂（バーニア）、大工小屋、蒸気滅菌室（ジスカメラ）、隔離病室などがあった。これらの建物の間に二つの井戸があり、管理用の建物は収容所の外、入口の東に集まっており、パン工場（ピタルニア）もその一隅にあった。

食事は一塊の黒パン三百グラム（現在の日本の食パンでいえば三、四切れに相当する）と、薄いスープが

飯盒の蓋に一、二杯、又は大豆を薄い塩で煮たもの少々が一日分で、一カ月に一度、スプーン一杯の砂糖（十グラム）が支給された。腹が減って、一塊の黒パンを一度に食べてしまえば後は食物はなくなってしまう、野草や茸などを現地調達しなければならなかった。パンを受け取ると、手で三分割して残りをなくさないよう背囊にしまい、三分の一だけを食えるという日課であった。

スープとは名ばかりで、湯に岩塩を溶かし、さらに豚などのラードを浮かせたもので、運が良いと細切れの肉片が入ることもあった。そんなスープでも支給されるのは朝晩の二回だけで、昼は多くの場合、パン三分の一切れと小さな魚の燻製であった。

収容所に到着した翌朝から早速強制作業が始まった。朝六時、軒下に吊るしてあるレール片を叩く音で起こされ、急いで毛布をくるくると巻くか四つ折りにして壁側に押しつけ、軍帽をかぶって兵舎前に出た。第三兵舎前に整列させられ点呼を取られる。

旧日本軍は四列縦隊で整列するのが規則であったの

で、習慣的にそのように整理していたが、ソ連軍では五列縦隊を基準としていたから、ソ連兵は「五列に並べ」と怒鳴る。すると、「アジーン、ドヴァー、トリ、……」「一、二、三……」と前方から数え始める。

これにはかなりの時間がかかり、ようやく員数が合ったところで朝食となった。この点呼風景は抑留中変わることなく、慣れるにしたがつて故意に四列縦隊に並び、彼らを困惑させて憂さ晴らしをしたこともあった。

朝食後、再度整列をして点呼を取り、作業に出発することになった。作業場所は歩いて二十分ほどの所であるが、言葉が通じなくて作業の要領がわからない。仕事は二人一組になって赤松の伐採作業であった。

直径四、五十センチの赤松に斧（タポール）で木の周囲に切り口を入れ、二人挽き鋸（ピラ）で切り倒す。真直ぐなものは六メートル、曲がったものは四メートルの長さに切り揃え、二組（四人）が共同して一日当たり十トントラック一杯がノルマであった。作業に取り掛かると、監督官（マツセル）が近づいて来て身振り交じりに何か言うが理解できない。そうすると怒っ

て早口になる。さらに分からないので立ったままでいると、私たちの鋸（ピラ）を取り上げ、切株の高さ十五センチの部位に傷をつけ、この位置で切れという。

私たちは五十センチくらいの高さのところを切っていたのだ。それほど低く切るのは作業能率が悪くなるので、なぜそのように切らなければいけないのか理由が分からなかった。

十五センチよりも切株が高く残っていると、運搬用トラックが入ってきたとき、車軸が切株に引っ掛かるためであった。それはとてつもなく大きなトントラックで、横にU・S・Aの三文字が明瞭に書かれており、戦争中にアメリカがソ連に供与したものに違いない。私たちに教えてくれた監督官（マツセル）は比較的親切であったが、切り方が理解できなくて反抗的に振る舞った仲間は、ソ連兵によって止める間もなく射殺された。問答無用の社会であり、畜生のように殺されることに怒りが募るが、下手に反抗はできなかった。一緒に働くことになった相手は、第一兵舎の中で隣に起居する新潟県出身の石川という差し物大工であつ

た。

伐採作業から帰って門に向かって歩いていくときに、官舎の横にジャガイモの皮が捨ててあるのを見つけた。どうもそこがごみ捨て場らしい。その皮の上に屈んで靴の紐を結ぶ振りをしながら、その皮を素早くポケットにねじ込み、兵舎に帰って飯盒に雪を入れただけで煮た。相棒の石川や班長の我妻さんを呼んで少しずつ分けて食べた。砂がついていて少しざらざらしたが、えぐいような特有な味は新鮮で、残った飯盒の湯まで飲み干した。

日毎に寒気が増し、食料不足は否めなく、空腹に耐えられず切り倒した赤松の木の皮を剥がし、よく食べた。剥がした松の木の皮を雪と一緒に飯盒に入れて煮ると、切りスルメのように感じられ、何度も何度も嘔んで、そして飲み下した。しかし、多くを食べると必ず下痢を生じ体力を消耗した。

なお、山林の中で焚火をすると、ソ連兵あるいは監督官（マッセル）から後始末についてうるさいほど注意を受けた。うっかりすると山火事になり、消防組織

のないこの地域では果てしなく燃え広がり、いつも燎原の火となって多大な損害をもたらすからである。

いつ帰国できるか分からない抑留生活の第一歩は、日々厳しさを増す寒冷の地で、強制作業に慣れることと、各自が飢えを凌ぐ工夫をすることで暮らしていった。

第三級労働者

昭和二十一年一月一日、日本にいれば炬燵こたたに入り、ゆっくり正月の三が日は楽しめるのに、シベリアでは今日一日だけが休日で、兵舎の中で横になっているだけであった。食事係は規定量のパン食に加えて、粟を炊いて餅のように握り、屋外で凍らせて各自二個ずつ配給してくれた。雑煮を作ろうとしてスープと一緒に飯盒に入れ温めたら粒々に溶けてしまった。いくら不作の年でも正月に粟など口に入れたことがなかったことを思い出すと、つい涙を催す。

正月はソ連人の祝日には含まれず、二日からまた伐採作業が待っていた。ウサチャンコウ、モリセイエ、サンペイカなどの監督（マッセル）の下で、吹雪のなか伐採したヨーロッパ赤松をトラックに積み込んだ。

さらに幾つかの木樁にも積んだ。

冬場は、普段の外気が零下二〇度で、雪原の上に水を撒くとそのまま凍ってアイスバーンになってしまう。彼らソ連人は、そのようにして凍らせた雪原を道路としてうまく利用した。まずトラックに積めるだけ材木を積み込み、さらに材木を満載した木樁をそのトラックに数台牽引させて、アイスバーンの上を走らせるのである。シャバルトイは丘の上にあり、運び出されるチタの駅は低い位置にあるから、冬場の木材搬出は能率のよい仕事であった。

しかし、冬の朝は八時ごろまで暗く、午後四時には日が暮れてしまう。「急げ、急げ（ダバイ、ダバイ）」と言われ作業に行き、空腹と寒さに震えながら一日のノルマをこなし、月を仰いで帰営した。

新京で部隊の編成が行われ、その際幸いにも関東軍被服廠保有の防寒服の支給があった。靴下も数枚確保しておいたので、シベリアの寒さに耐えることができた。当時の関東軍の防寒服は、シベリアの厳寒にも耐えられる本当に良いつもりであったと思う。

しかし、その防寒帽や防寒手袋も最低気温が零下四〇度くらいまで下がると真っ白に凍り、防寒具を着けたの作業はどうしても素手でやるようなわけにはいかない。いらいらして、少しのつもりで防寒手袋を取り手でロープを締め付けようとすると、指から手の甲に向かってロウソクのように白く固くなり、さらに進むと紫色になる。これは凍傷であって、白いうちにすぐ手袋をはめて擦るか、焚火にあたらせ徐々に暖めていかねばならなかった。そうしないで放っておくと確実に指なり手なりを関節で切り落とすことになった。しばしば耳や鼻といった防寒帽子から出て動かない部分が凍傷にかかったが、幸い大事に至らずに済んだ。

零下四〇度以下になったり激しい吹雪の日は、さすがに作業は中止になった。その日は余分な体力を消耗しないように兵舎で横になって過ごした。

寒さの少し緩む三月に、ウーリヤとワーリヤという二人の若い女性が監督官（マッセル）としてやって来た。年齢はそれぞれ十七歳と十八歳とか言っていたが、身長が二人とも百八センチを超える大女で、体格で

も力でもとても勝ち目はなかった。「急いで、急いで（ダバイ、ダバイ）」と口に出して作業の督促をしたが、娘らしいところもあって、その日のノルマを告げると見張りのソ連兵とどこかに遊びに行ってしまう、夕方にはか帰ってこないこともあった。そんなときは私たちがものんびりと仕事をする事ができた。

五月になると韭が芽を吹き始め、毎日昼休みに採取しておいて飯盒で煮て食べた。しかし、このころから私自身の体力が衰え、午前中に二、三時間悪寒がし、やがて高熱が出て三、四時間続き、木材伐採の際に息切れがして苦しくなった。伐採を長く続けると脂汗が出て顔面が蒼白になるが、我慢して鋸（ピラ）を挽き続けた。一カ月に一度来る巡回の女医に診てもらおうと、素裸にしておいて尻の皮膚を右手親指と人さし指で「ぐい」と摘み、皮下脂肪の有る無しをみて、少し考えてから「第三級にする」と言った。松の木を切る作業は免除するが、収容所内の勤務をせよ、ということである。

五月三十一日から炊事係を勤めることになった。入

所した当初から第一級の者は伐採の労働、第二級の者はたき木作りや収容所修理、第三級者はソ連人官舎の手伝いや炊事係であった。第三級者はほとんど何らかの病氣持ち若しくは栄養失調者であったので、私も病氣になったとみて間違いなさそうだ。

毎日の伐採作業という強制労働の日課がなくなつて、肉体的には随分と楽になった。さらに炊事場だから何か食物はある。腹が減つても松の皮や韭やソ連人が捨てた残飯を食べなくてもよくなっただけ幸せである。

私が炊事係に慣れた八月上旬、約百五十頭の牛、綿羊の屠殺体がトラックで運び込まれた。これらは官舎にいるソ連人監督官及びその家族、見張りの兵士たちの食料と、私たち日本人捕虜のスープに入れる肉、骨内臓及び脂肪をとるためのものであった。炊事係はこれらを解体して保存し、少しずつ調理しなければならぬ。

まず、ソ連人用の動物を官舎の前の空き地で解体することになった。当時の日本人は肉食に慣れていなくて、家畜は家族同様可愛がって使役するが、それらを

解体して食べようとはしなかった。だから解体の仕方をほとんど知らなかった。額を鉄砲で撃たれて死んで硬くなっている牛を解体するには、牛刀を胸の皮膚に突き刺し、真直ぐ上下方向に進めて胸、頭、そして腹の皮膚を肛門まで左右両側に開き、その処置を背中まで続けて皮膚を完全に剥がしてしまう。その後、胸の骨に沿い刀を入れ、胸を左右に開き心臓と肺を取り出し、次いで腹を開いて胃、腸、肝、腎といった内臓を取り出した後で、手足および頭を胴体から切り放した。教えられても最初は非常に心理的な抵抗があり、恐る恐るやるうちに慣れてきたが、動物特有の臭い、死臭、内臓の発酵した臭いが混じって鼻を刺激し、さらに被服にいつまでも染みついている、兵舎に帰ってからも嫌な思いをした。

毎朝の洗顔はしたことがないが、風呂（バーニア）には一週間に一度、日本軍の階級順に入ることができた。衛生兵あがりのいる医務室と私たち全員の責任者である竹内大尉や奥田大尉がいる本部との間に、十人くらいが一度に入れる風呂（バーニア）があった。湯

舟はなくて、中で裸になり体を拭くだけの丸太小屋で、入室するときにドラム缶で沸かした湯を桶に一杯だけ支給され、これに布切れをつけて体をこすり、わずかな湯を底に残しておいて最後に肩からかけて終わりである。厳冬の折など肩までつかかる風呂に入れたらどんなに気持ちがいだろうとよく思った。

脱いだ衣類は全部、当番が蒸気滅菌室（ジスカメラ）に持って行って滅菌し、風呂（バーニア）から出ると自分の衣服が消毒され置いてある。着るとまだ温かさがわずかに残っていて、寒い季節には心地よかった。蒸気による消毒は小豆大の南京虫と虱の駆除が目的で、衣類の縫い目や襟にいるそれらを駆除することができた。

夜になり、私たちが昼間の労働の疲れで熟睡しているときに、南京虫は板の隙間や柱の陰から出てきて、人間の血を吸いたい放題吸って、真っ赤に膨れると離れていった。吸われた跡が痒くてたまらない。南京虫の攻撃を避けるために、夏の夜は丸太の天井のうえに上り寝たこともある。

八月三十一日、腸チフスの予防ワクチン注射が実施された。他の地区では腸チフスが猛威をふるったといふことであつたが、幸い当収容所では、予防接種が効いたのかどうかは分からないが、一人も患者は出なかつた。

九月一日、パン食に加えて雑穀が支給されるようになり、突然米が粉穀付きのまま届けられた。粉穀を取り除かなければ食べられないが、この粉穀を取り除くのが私の担当になつた。どのようにしたらよいのか、はたと困つてしまつた。

故郷の家に石臼があり、大豆を挽いて黄粉をつくつたり、蕎麦を挽いて蕎麦粉をつくつたことを思い出し、石臼と同じ物を松の木の切株で作ろうと決心した。なるべく太い松の木を鋸(ピラ)を使って三十センチの厚さに二個切り取り、上に置く松の木の表面三分の一の位置から底面まで、手首が入るくらいの穴をあけ、下に置く松の木の表面には鋸(ピラ)を使って浅い溝を作り、その真ん中には太い釘を打ち込んで、上に置く松の木を動かしても落ちないように工夫した。そし

て、上の松の木に回転させることができるような手を付けた。これで木臼ができた。その次は、四枚の羽を付けた手回しの風車を作り、木臼で挽いた粉穀と米の選別を行い、粹付きの金網で選別を完了した。五日間もかけて原始的ではあるがこのような精米装置一式を作り、一定量の玄米を得ることができた。

この米は小粒の細長い種類で日本の米とは違つていたが、稗や粟と混ぜて煮ると粘りができた。それをすりこぎ状の棒でこね回し、支給された砂糖を混ぜて饅頭のように握ると大福餅ができた。皆にも話して砂糖を集め、大福餅を作つて提供して大変喜ばれた。

十二月五日、今年も残すところ一カ月弱になつたが、帰国のめどは全く立たない。とうとう一部のグループが伐採作業のサボタージュをやつたらしい。それを監督官(マッセル)から聞いた収容所長は、怒つて私たち全員のリーダーである竹下大尉を責め、責任を取らせる形で、この寒さの厳しい中で「営倉入り」の処罰を科した。そのためサボタージュは中止になり、また同時に、幹部の奥田大尉以下数人の元将校はサボター

ジユを扇動したという理由で他の収容所へ急遽移されていった。代わりに三輪元兵長がチタ市からシャバルトイ収容所へ派遣されてきた。

彼は強制労働は免除されていて終日収容所に残り、夕方みんなが作業から帰って来ると、私たちを集めて「労働の喜び」を説き、その反対に日本人元将校たちは働かないのに良い待遇を受けていると云って、日本軍の階級制度を公然と批判した。また三輪兵長の主張に積極的に賛同したり、強制作業に批判的な意見を見張るための組織を作り、「友の会」と名付けて彼に協力させた。したがって、余分なことが発言できなくなり、さらに集まって話をしたりすると疑われて、厳冬にも増してたいへん重苦しい年末になった。

日本兵埋葬

昭和二十二年一月一日、収容所の第二兵舎炊事室の前に門松を立て、名ばかりの正月を迎えた。しかし正月といえども炊事係は仲間たちの三食と正月の特別食を用意しなければならず、早速昨年作った糊摺機で高粱挽きの仕事をした。

一月二日、零下三〇度以下の寒さにもかかわらず伐採作業は行われ、一級労働者は作業に出動した。今まで頑健で知られた五十嵐組の四人は、昨年末から続く厳寒のため氷状になった材木が滑って扱いにくく、素手で扱ったために凍傷になり作業能率は随分下がってしまった。

一月の寒さの厳しさが続く朝であった。点呼のときに一人足りない。気づいた第三兵舎の隣人が、兵舎に戻り様子を見にゆくとまだ毛布にくるまって寝ている。起こそうと思つて手を掛けると、既に硬く冷たくなっていることが分かった。急いで引き返し、そのことを警備のソ連兵に告げると、彼は所長(ナチャーニツク)に報告し、やがて日本人捕虜を引き連れ仕事場に向かつてしまった。残っている炊事係に所長(ナチャーニツク)からの命令が伝えられた。「収容所西の望楼より百メートルの丘に埋葬せよ」とのことであった。私たち四人が第三兵舎へ行くと、北側下段の中ほどに毛布にくるまった若者が死んでいる。四人で毛布の端をもって兵舎の入口まで運び出し、「どのようにしたら

よいか」と相談すると、中年の男が、「墓地へ行つて、まず積もっている雪を取り除く。土が見えてきたら、それは凍土になってるので、その上で焚火をして少しずつ溶かす。溶けただけツルハシで掘り進み、スコップで砂を出して寝棺の大ききの穴を作る。そこに毛布のまま埋めるのだ」と静かに話してくれた。

道具と薪を手分けして運び、三時ごろまでに一人一人埋められるだけの穴が掘れた。再び引き返して、第三兵舎入口に置いてあつた遺体を毛布ごと持ち上げ宮門から埋葬地まで雪の中を運んだが、その遺体は実に軽かつた。穴に遺体を入れ、掘り出した土を戻した。元の高さより少し盛り上がった程度の土饅頭ができた。凍土のため十分深くまで埋めることはできなかった。また、この辺りには石というものがなく、その上に三石（みついし）を置くこともできなくて、ただ松の木の枝を折り目印としただけであつた。

シャバルトイ捕虜収容所では、死者に対し医師による検視もなければ死者の名前を書き記すこともなかつた。ましてソ連人事務担当者や収容所所長が埋葬に立

ち会うことは考えられなかつた。私たち関東軍兵士は他の日本軍兵士と異なり軍籍を示す「認識票」を身に付けていなくて、さらに収容所に収容されても捕虜番号を交付されなかつた。したがって死者がだれなのかということは、本人と収容所の事務担当者以外は知らなかつた。私たち四人はだれも彼の名前や出生地を知らなくて、埋葬したあとに手袋のまま両手を合わせ「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」と唱えただけだつた。しかしこのとき、死者の無念さを考えるとかわいそうではなかつた。夜中にきつと苦しかつたに違いない。日本のどこかにいたのなら、たとえ「医者はいなくても」最後の「死に水」くらいはだれかが与え、「苦しいか」と優しい言葉を掛けてくれたであろう。「日本に帰りたい」とか「母に一目会いたい」といった心をだれに伝えることもなく静かに息を引き取つたのだ。私も死ねばこうなるのだということを強く感じ、こんな所で行路病者のように死んでたまるかという念を一層強くした。

辺りには早や夕闇が迫ってきていた。「夕食の準備

が遅れそうだな」というので、四人が道具を手分けして持ち、早々に炊事場に戻った。

二月になってから二人の死者が続けて出て、いずれも同じようにして埋葬した。死の苦しみを訴えることもなく、望郷の念を伝えることもなく、皆が寝ている間にだれにも迷惑を掛けることなく静かに息を引き取っていった。

春になって雪解けたころ墓地を眺めると、私たちが埋葬した三遺体のさらに西側に数柱の埋葬跡を認め、この一年半の間にかんりの犠牲者が出ていたことを知った。

最後の強制労働

四月十日、突然身体検査があった。全員一列に並び、順番に医務室に入り素裸になると、いつも巡回に来る女医が尻の皮膚を右手で「ぐい」と摘み、皮下脂肪の付き方を検査した。そして皮下脂肪の付き方の悪い者と重症の怪我人二百人を選び、「帰国（ダモイ）」だと告げた。体の弱い第三級の者はほとんど含まれたが、私はどうしたわけか選ばれなかった。彼らは手早く持

ち物をまとめ、翌朝、大半の者が強制作業に出て留守の間に、迎えの七台のトラックに分乗し慌ただしく出発していった。

残された者の心に一瞬の空白が生じたが、残る日本人は百人になり、兵舎に余裕ができたので、第二兵舎を炊事室及び食堂とした。これまでは当番が皆の飯盒を持っていつてもらってきた、それぞれに渡し、各自は寢床近くで食べていた。それからは飯盒に番号を付し、そこに食事が入られて、食堂が集まって一緒に食べることになった。一同が揃って食事ができるようになり、帰国のめども立ったので、春の訪れとともに幾分穏やかな雰囲気収容所内に生じてきた。

五月三十一日、シャバルトイ収容所の全員百名が、第五二収容所第一分所に突然移動することになった。収容所を閉じ、迎えのトラック四台に分乗して、アムール川の支流シルカ川になるチチンカ川川岸に建つ第一分所に向かった。

途中で、監督官（マッセル）自らが伐採した松の木をトラックに積み込んでいるのを眺めて、「急げ、急

げ（ダバイ、ダバイ）」と声を掛け、日頃の鬱憤を晴らしながら、約二時間で第一分所に到着した。

そこには百九十人の日本人捕虜がいた。彼らと一緒に、冬から春にかけて伐採された松の木は、チチンカ川の川岸に大量に集積されており、春の雪解けとともに増水した川水を利用して川下に流し、シベリア鉄道に積み込むためであった。

私たちの作業は、集積されている木材を川に落とし、鳶口一本でその上を渡り歩きながら木材を流す作業で、慣れないうちには中心を踏み外し何度も川に落ちたものだった。雪解け水は肌を刺すように冷たく、川岸で焚かれてゐる火にあたり体と衣服を乾かした。また、わずかな暇に川岸に自生している蕪を採り飯盒で炊いて食べたり、針金で即席の釣針を作り餌なしで多くの魚を釣り上げ、それを焼いて食べることもでき、それなりに面白く過ごすことのできた時期でもあった。この流木作業には一カ月ほど従事したが、特にノルマがなく、その点がよかったのかもしれない。作業完了と

もに、またトラックに乗ってシャバルトイへ引き揚げた。

従来どおり、一級労働者は松の木の伐採に出掛けたが、今度はテント持参であった。近くの太いものはごとく切り尽くしてしまつたので、遠方で野営をしながらの作業であった。これが二カ月間続いた。たまたま大雨に降られ、テントの中まですぶ濡れになつてしまつたこともあつたという。

一方、私たち病弱の三級労働者は、数日間、国営農場（ソフホーズ）の収穫作業に行かされた。作業は燕麦の結束で、馬が機械を引いて刈り倒していつたものを、一抱えほどの大きさに集めて紐で結ぶことであつた。結構忙しかつたが、小学校を宿舎として当てがわれ、床の上で休むことができた。

それが終わると、集団農場（コルホーズ）の馬鈴薯掘りや大根、キャベツの収穫の手伝いであつた。このときは、農場主が馬車での送迎してくれた。生のまま食べることでできる野菜の取り扱いなので、監督（マツセル）の目を盗んではこっそり大根を引き抜き、手

際よく手や服で泥を拭い取りひたすら食べた。また、少しの暇を見つけては枯れ枝を集め、馬鈴薯を飯盒で煮て一日三、四回食べ、太鼓腹をして「フーフー」言いながら作業が続けたが、捕虜にとっては腹いっぱい食べられるときが正月であった。

集団農場（コルホーズ）の食事は捕虜も家族も同じで、さらに子供たちと一緒に納屋や作業小屋の干草の中で寝た。民間人と身近に接したのはこの時期であったが、捕虜の身である私たちであっても、とりわけ差別をしないロシア人の心に触れ、軍人との落差に戸惑いも覚えた。

九月になり、シャバルトイ収容所に捕虜全員が集まると、今度は全員で伐採作業に出かけた。伐採場に着くと、赤色、黄色、白色の沢山の茸が生えていた。昼休みなどに採って飯盒で煮て食べた。最初に沸騰すると原色の泡が出るので、その泡を捨て去り、ちよつと味見すると少々苦いものもあったが、そんなことにはかわらさずによく煮て食べた。今考えると、よくぞ中毒にならずに済んだと思う。非常に危険なことでは

一歩間違えばあの世行きであった。この茸のお陰で空腹感を覚えずに、作業も捗った。この作業以後、私は再び一級労働者に戻された。十分体力が回復したと判定されたのであろう。

十二月、大きなヨーロッパ赤松を切り尽くしたので、これからは白樺の木を伐採することになった。白樺は肌が白く、見た目には良さそうだが切ってみると非常に硬く、これまでと同様のノルマを達成するには多大の努力を要した。しかしこのノルマは変更されることなく、ノルマを達成するために交替で食事をしたり昼食を抜いて働いた。

さらに、このころから、ノルマに応じた食事が供与されるようになった。三日前の仕事量に応じ食事の量が決められ、百パーセントより多くのノルマをこなした者はA食でパン三百五十グラム、百パーセント達成者はB食でパン三百グラム、未達成の者はC食でパン二百五十グラムで、スープもまた同様な配分となった。昭和二十三年一月一日、在ソ連三回目正月を迎える。珍しいことに昨日は伐採作業は休みで、その代わ

りに収容所の清掃をした。自分たちの寢床の周囲から始めて、第一兵舎、食堂である第二兵舎、便所掃除などを行い、収容所全体が非常に美しくなり、まさに正月という気分になった。朝食に粟と米で作った雑煮が出て、ほんのわずかの正月の朝らしさを味わった。昼食には、向上食と題して日本の「ぼた餅」を真似たものが出て、昨年の正月も同じ物を作ったことを懐かしく思った。味は名前ほどではないが、故郷に思いが走る。両親や兄弟たちは元氣だろうか。どんな正月を迎えているだろうか。弱氣が顔を出す。

午後からは演芸会が催され、三輪兵長が指名して結成された文化部演芸班が、プロレタリア題材の演劇を行った。第二兵舎内の端を整理して舞台とし、そこに毛布を繋ぎ合わせた即席の緞帳を張って舞台をしつらえた。捕虜はもちろん、収容所長（ナチャーニツク）、監督官（マッセル）、ソ連兵、官舎に住むロシア人婦人や子供たちも見物に来て、舞台の前に並んで座った。そして久しぶりに高らかな笑いを耳にした。

寛いだ半日を過ごしたが、夜になつても外は激しく

吹雪が舞い寒気は厳しく、集合した捕虜の間に帰国の話はまったく聞かれなかった。もしこのまま今年帰国できなければ、生きる希望が失われるような気もした。

三月、伐採作業中に再び高熱に襲われた。相棒の石川と伐採作業に就いて白樺を切っていたとき、急に震えがきて寒くてたまらない。「寒い、寒い！」と言いながら二時間ほどすると、今度は四〇度くらいの熱が出て、目の前がボーっとなり朦朧としてきた。汗が出てしばらくすると元に復する。これの繰り返しが三日目ごと起きる。監督（マッセル）は、私が仕事が嫌いだからインチキをしているのだと主張し、こうした症状にもかかわらず「しばらく作業を休止して寝かせておけば治る」と言つて取り合ってくれなかった。四十度の熱が出たときの苦しみは大変なものである。

たまたま二カ月に一度回診に見えた宮川軍医少佐は、私を裸にして寝かせ、左脇腹を押さえながら事情を聞き、これは典型的なマラリア病であると診断を下された。ソ連の女医にも説明をして同意を得、さっそく私は収容所の西北隅にある休養室に隔離された。

マラリア——こんな寒い土地でマラリアに……。関東軍兵士として南満州の飛行場勤務時代にマラリア蚊に刺され、保菌者となっていたとしか考えられない。ただし、比較的健康であったので発病しなかったのであろう。

ソ連では、労働の義務があると同時に病氣時の休養の権利もあるので、休養室に入ると薬は何も与えられなかったが、三度の食事は運ばれてくるので、部屋の中で横になって完全休養すればよかった。一日中横になって休んでいるうちに周期的な高熱はなくなり、二週間で普通の体調に戻ったが、体重は十キロも減って四十キロになってしまった。それでも回復したということで一級労働者のグループに戻された。

四月一日、チタ市より派遣された民主グループ四人が収容所に到着し、夕食後全員を集めて、新日本建設のアジ演説を行った。

「日本に帰国したときは、我々の力で天皇制を廃止して新日本を作るのだ。だから安易な帰国（ダモイ）という気持ちではなく、生まれかわった気持ちで日本

上陸なのだ」と言う。これを聞き「帰国（ダモイ）は間近いだろう」とだれもが実感し、変に反抗するよりも黙って聞き流して早く帰るのが先決だと、じつと我慢して聞いていた。この演説は毎晩のように行われた。

しかし、予想に反して四月から生産競争が始まった。直径四十センチ以上の大きな松の木は切り尽くしてしまっていたので、切り残してある小さな木の伐採が始まった。かなり無理して昼食時間も交代で切ったり遅くまで残業したりしても能率が上がらなく、今までの百パーセントの目標を達成するのが精一杯である。しかし今回のノルマは一四〇パーセントといった実に過酷な要求である。全員休憩なしで作業を続けた。うわさでは能率を上げた者が早く帰国（ダモイ）できるといっているので、川上組、小林組、私の属する我妻組などが気合いを入れて無理して頑張るものだから、他の者たちも引っ張られて相当な無理をした。

各人とも体の消耗は激しく、たちまち過労から病人も出たが、一カ月で一七〇パーセントを達成して、珍しく収容所長（ナチャーニツク）も誉めてくれた。四

人組民主グループは、この成果を「人民の労働の喜び」と評価し、この経験を体得して日本に帰り、「真に目覚めねばならない階級闘争を開始しよう」と言った。

この生産競争の際に、達成率に応じ百五十円前後の賃金が初めて支払われた。さっそくもらったばかりのグループを持って、官舎やソ連兵士の所に定期的に生活用品や食料品を売りに来るトラックに殺到し、瞬く間にパンを買って使ってしまった。しかし、これがソ連における最後の強制労働となった。

五月一日、万国労働者の祝日、メーデーである。全労働者は三日間休日となり、メーデーを祝することになった。休日の一日目には第三兵舎の前で運動会が開催された。綱引き、籠かき競争、二人三脚、玉入れ、リレーなどの種目があり、久しぶりに歓声を上げた。昼食には飯盒の蓋にびっくりするような生菓子が出た。よく見ると、米と雑穀の握り物であって、目を丸くして見た割にはそれほどよい味ではなかったが、その製法も同時に発表された。

二日目には、正月と同様に第二兵舎において演芸会

が行われた。自作のプロレタリアを扱った作品で、今回も官舎の婦人、子供たちも参加し、好評を博した。夜には映画も上映された。

三日目は完全休養日となった。その後、小グループでの作業はあったが、まとまって全員で出勤する作業はなくなった。

五月二十日、突然「帰国」のうわさが立ち、作業もな収容所の清掃をする。

五月二十四日、朝の点呼のあとに、「全員帰国予定」と口頭で発表される。

これを聞いた途端「うおー」というどよめきが上がった。私たちの喜びはこの上なく、三年間もの苦労の後によりやく今実現されるかと思うと感無量であった。作業はないので所々に集まって、

「日本は今どうなっているだろうか」

「我が家はまだ残っているだろうか」

「家族は無事でいるだろうか」

と故郷に心を配るが、表情は明るい。互いに頭髮を短く切ってさっぱりとして、いつでも帰れるよう準備を

整えた。まとめた荷物を広げてみたり閉じたりしている者も少なくない。

ナホトカ港を離岸

五月二十六日、待ちに待った帰国（ダモイ）の朝である。第五二地区第一〇分所に入所した全員が元気に帰国できるとよかつたのだが、心ならずも何人かの犠牲者が出てしまつて、一緒に帰ることができなかった。残念に思うが致し方ない。同僚を誘つて望楼の西側にある墓地に出掛けた。十柱ほどの仏の眠るその墓は、赤土が幾分盛り上がり、その周囲に緑色の草が薄く芽吹いていた。墓の前にしゃがみ両手を合わせると、名も知らぬ同僚をここに埋葬した日のことが思い出された。

「今日、自分たちは何とか帰国の願いが叶つてこれから出発するが、二度とここへは戻つて来られないだろうし、また戻るつもりも全くない。今後、君たちの墓がどうなるか分からないが、ここでお別れする」と言い残して足早にその場を立ち去つた。

―集合を命じられ全員が第三兵舎前に集まると、「こ

れから持ち物の検査をする」と宣言されて、順に一名ずつ呼び出され机上に持ち物を広げた。「タケシ・イトー」と呼ばれ、緊張して持ち物検査の机に向かい駆け足で行く。雑囊を開けて、水筒、飯盒、箸入、雑記帳、ぞうきん、靴下などを並べる。係官の一人が雑記帳を手に取り、中をぺらぺらとめくり途中で手を止め、傍らの係官に指で何やら示して話し始めた。「まずい」と思うと同時に血の気が引いていった。係官はその雑記帳を取り上げ、「よろしい（ハラシヨ）」と言つた。

検査は終わったのだ。早々に残りの荷物を雑囊に押し込み、もとの隊列に戻つた。二時間ほどで持ち物の検査は終わり、全員帰国してもよいことになつた。

トラックの荷台にそれぞれの荷物をまとめて乗り込んだ。病気で萎れていた同僚もみんな元気になり、大声で怒鳴つたりふざけたりして、遠足に行くような雰囲気である。全員が乗り込むと、収容所の係官二人も珍しく鞆を抱えて助手席に乗り込み、収容所長（ナチャーニツク）も営門の前で見送つてくれた。トラックの上では「解放の歌」「インターナショナル」

が歌われ始めたが、すぐに話に夢中になった。途中でチンカ川の畔にあった第一分所に立ち寄り、すでにトラックに乗り待機していたその百九十人と合流し、彼らと共にすぐに出発した。昼過ぎにトラックはチタ駅に到着した。駅前の広場には多数の仲間たちが同じような格好をして到着していた。三年前の十一月に下車させられたチタ駅であるが、昼間見るのは初めてだった。

十五時、収容所ごとに駅前広場に整列し、収容所から同伴してきた係官が書類に基づき名前と人数の再点検を行う。約千二百人が周辺からチタ駅に集結したようで、点検終了後、以前送られてきたときと同様、引込線の何本かの線路を横切り家畜運搬用列車に乗り込む。車両の内部は以前と同様で上下二段の蚕棚式であったが、以前ほど持ち物がなく、五十人が一車両に乗り込み、夕方になっていよいよ列車が発車する。どちらに進むか心配であったが、日の沈む方向とは反対に走り出したので、ウラジオストックの方向へ行くものと思ひ安心をした。

この列車には炊事車が連結されていて、今までの収容所よりは幾分ましな、手を加えた魚のフライや薫製、そしてキャベツの酢漬けなどがパンに添えて出された。人数の多さに比し食料や燃料が不足しているので食料の仕入れで停車し、沼に溜まっている水を飲んだこともあったが、腹をこわす者はいなかった。列車は名も知らぬ駅でしばらく停車すると、私たちは下車させられて、駅舎の修理、駅前の建物の取り壊しなどの作業をさせられた。乗車して七日目の午後、大きな川の鉄橋を渡った。これはハバロフスク近くのアムール川に架かる大鉄橋だとだれかが教えてくれた。やがて、進行方向右手に多数のミグ爆撃機が並ぶ大きな飛行場を眺めることができた。

一昼夜を走り続け、ナホトカ港に到着したのは乗車してから八日目の六月三日昼過ぎであった。八日間の車上生活にもかかわらず、帰国できるといふ希望があったためか短く感じられ、アムール川の大鉄橋を越してからは、帰国を現実のものと実感して「早く走れ、早く走れ！」と心も弾んだ。

六月三日、全員下車した午後、簡単な点呼があり、重病人の有無が確認された。驚いたことに、シャバルトイ収容所の係官の一人がナホトカ港まで同行していて、彼が私たちの点呼をとった。ここでまた部隊編成が行われ、私たち病弱者は全員第五三部隊第二〇〇中隊に属し、第二分所に宿営することになった。

私たちの宿舎は広大なナホトカ港を見下ろす山の腹にあり、青黒い日本海を久しぶりに見ることができた。港の棧橋には多数の船が停泊していて、どれが私たちの乗る引揚船かは分からなかった。日本海の見えるこの建物は、先着の引揚者が祖国日本へ帰る前に、しばらく船待ちした場所に間違いなく、「いつの日に日本へ帰れるだろう」と、海と船を見た途端に早くも想いは故国に飛んだ。同じ収容所でもシャバルトイの山中にいたところと、この貿易港として活気に溢れた町で、多数の船の見える収容所とは全く感じが違い、さらに帰国を待つだけの身なので、何をしても皆が実に陽気に振る舞った。

六月九日、病弱兵に分類された第二〇〇中隊百二十

名は第一分所で入浴をし、その後、ニュース映画を見た。そこには廃墟と化した東京の街並みと、食料を求めて徘徊する哀れな日本人の姿が映し出された。それを見て、敗戦により我々兵士は全て外国の捕虜となり、国内は空襲や爆撃のために焦土となって、帰国しても住居もなく、親、兄弟は散り散りとなり、どこにいても分らないような空しい想いに襲われた。

その後、私たちは毎日、日本人捕虜の被服調査などの比較的楽な仕事を行い、健康な者は収容所の建物の修理、改築の作業を行った。

六月二十七日、ナホトカ港に日本からの引揚船が着岸した。岸壁に横付けした船は日の丸を船尾に立てているが、赤十字のマークもなく、実に古めかしい貨物船である。よく見ると船首に「信洋丸」と読み取れる。今度の戦争で生き残った貨物船で、とにかく引揚船に転用したものであろう。

午前中にナホトカ港の岸壁で復員式があり、持ち物すべてを携えて整列する。私たち一同を前にしてソ連軍中佐は堂々と歎送の辞を述べた。

「あなたがた日本人兵士の誠心誠意の労働により、我が祖国ソ連邦は、ドイツ軍の進攻により廢墟と化したレニングラードを初めとする多数の都市や鉄道を、かくも迅速にそして完全に復旧することができた。ここにソ連邦人民は心より感謝するものである。この上は祖国日本に帰国し、団結して労働者のための新生日本を建設していただくことを熱望する」というものであった。あまりに見事な日本語と調子のよさに驚き、呆れてしまつて怒る気にもなれなかつた。

その後一人ずつ名前が呼び出され、呼ばれた者は引揚船に乗ることができた。遠くから発せられる呼び声に聞き耳を立て、緊張して待つていた。岸壁の「信洋丸」の甲板から時折船員が顔を出し、乗船風景を退屈そうに眺めては引つ込む。こちらは早く呼ばれて乗船したい一心である。

「タケシ・イトー」と聞こえた。私の番だ。急いで荷物を持って、一目散に信洋丸を目指して走つた。タラップを一気に駆け上がり、甲板に達した。乗船するまでが勝負で、乗ってしまえば帰国できる。

「どうとう乗つたぞ。船に乗つたからには、もう大丈夫だ」と自分に言い聞かせた。後になって辺見ジュンの著書により知つたことだが、ナホトカ港まで来て名前が呼ばれなく、再び元の収容所へ帰された者、別の収容所へ送られていつた者がいたという。彼らの心情はどんなであつたらうか。

夕方までに千九百七十名ほどが乗船した。そして汽笛を「ブオー・ブオー・ブオー」と三度鳴らしてゆっくり岸壁を離れ始めた。全員甲板に出て、最後の抑留地ナホトカが夕日の中に遠ざかるのを眺めていた。どの姿を見ても古びた軍帽と軍服、その上体は瘦せ衰え、あまりにも哀れである。そんな体で三年もの間、飢餓と嚴寒そして過酷な強制労働の中で、よくぞ生きてこられたと思う。神がこの世にいるかどうかは分からないが、まず何とか帰国できることを神に感謝したい気持ちでいっぱいだった。

遠ざかる異国の地には、恐らくまだ帰れない多数の仲間たちがいて、強制労働や病気で苦しんでいることだろう。彼らが一日も早く無事に帰れることを祈るの

みである。それと同時に、共に働いた仲間が「帰りたい」と仲間にも告げずに息を引き取ってしまった。名前も分からなくて、帰国しても死亡して埋葬したことを伝えようもない。彼らの帰りをひたすら待つ両親、妻、子供たちの気持ちを考えると胸が痛む。

沖に出れば船の周りをカモメが飛び交い、波も穏やかで、規則的なエンジン音だけが聞こえ、船は確実に祖国に向かって南下している。

船中では、三食ともに赤い梅干しの入ったお握りと沢庵二切れが出た。何と美味しかったことか。生き返ったような気がする。やはり、白い米と漬物は日本人の好物である。早く熱い味噌汁が飲みたい。

六月二十九日、緑の濃い山々が見え始め、シベリアとは違って、断崖に打ち寄せ砕け散る白い波が暑い日差しの中ではつきりと見え出した。

急に蒸し暑くなり、夕闇が迫るころ、点々と見え始めたあの赤い電灯の光、懐かしい祖国日本の久しぶりに見る風景である。いよいよ舞鶴港に入港したのだ。気持ちは早く上陸したいが、港の入口、大丹生検査船

地に船は投錨し、検疫のために船中で一泊するそうである。夕食後デッキにもたれながら、既に日本の港の中なので何も心配することもなく寛ぎ、夕闇の深まる舞鶴港を眺めて、一体これまでの自分とは何であったかを静かに考えた。

帰国

昭和二十三年六月三十日朝、全員上陸を許可され、六年ぶりに日本の土を踏むことができた。モンペ姿の婦人会の出迎えを受け、言うに言われぬ感激が込み上げてきた。

上陸後、新しい被服の支給を受けた。帰国が遅れたため、標準的な衣服がなくなってしまうと、小さなものか大きなものばかりが残っていた。大は小を兼ねて大きな服を選んだ。下着は陸軍の少々大き目のもので、上着は陸軍の適当なものがなかったので、七つボタンの予科練のものを着用した。靴は新品の十一文の編上靴を選んだが、大きすぎて靴下二足を履いて何とか間に合わせた。着替えると上から下まで消毒してあつて大変気持ちは良かった。入浴後、種痘接種とツベルク

リン検査があり、その後、医師による問診が行われた。

「どこか具合の悪いところはないか」

「今年三月にマラリアを発症した。薬も何の処置も受けなかったが、今は平熱である」

「それは危険だ。これを一日一度一粒ずつ飲むように、そして、三カ月間は安静にして休養するように」

その医師は、白いキニーネを一握り、約五十グラムくらいの袋に入れて渡してくれた。

帰宅してこの注意を忠実に守ったが、この適切な指示によつて二度と高熱に襲われることはなかった。私の命を救ってくれたこのキニーネのことは、今もって忘れられない。

診察が済むと夕飯になった。明るい電灯の下で、白い米の飯を食べ、熱い味噌汁を飲んで、六年ぶりに畳の上で寝る。このごく普通の生活が、外地にいた者にとつてはこの上ない待遇である。

七月一日、朝六時から進駐軍による身上調査が行われた。個室に一对一で机を挟んで調査官と向かい合い、調査官である米人が流暢な日本語で尋問する。「旧軍

隊で何をしてたか」、「ソ連軍の軍事施設で何を見たか」といった内容で、口答をさらに覚書にして提出させられた。二千名近い聞き取り調査で、待っているのも大変である。

七月二日、舞鶴引揚援護局調査課資料班が、軍隊当時の所属部隊名、駐屯地、地位、職務内容、そして抑留地と抑留期間の聞き取り調査を行った。夜は、引揚援護局主催の慰労夕食会があり、援護局長の慰労の言葉があった。明日は、各自の故郷に向かってそれぞれ出発する。長かった束縛の日々の中でよくぞ生きて帰れた、と思っているうちに寝ついたようだ。

七月三日、起床は三時であった。朝食後、東北方面の帰国者がまず出発した。三年間苦楽を共にした同僚の石川および青木を見送る。続いて関西、九州方面の帰国者が出発し、最後が東海地区で、出発は正午であった。船で西舞鶴まで行き、そこで婦人会並びに青年団から「長い間ご苦労さまでした」とねぎらいの言葉を受け、十四時五十分発京都市に乘車した。車窓からは木造の日本家屋、水田で四つんばいになって田の草

取りをする農夫の姿が六年前と同様に眺められ、故郷の安否を心に掛けたが、心配はなさそうである。十八時四十分、以前と少しも変わらぬ京都駅に到着した。

七月四日、京都発零時十分の夜行列車で名古屋に向かい、早朝五時三十分に着した。途中からではあるが、沿線が爆撃により見る影もなく破壊され、名古屋城と金の鯨は跡形もない。代わりに見られるものは、進駐軍の立派な円形宿舎と進駐軍相手の娼婦たちだけである。早朝にもかかわらず、駅裏は人が多く混雑しており、物価の高さだけは異常で、ナホトカで見た映画のように、名古屋の街全体が廃墟と化してしまつたようだ。

名古屋七時五十分発の中津川行に乘車する。出発してすぐ右側に見える鶴舞公園内の公会堂は爆撃を逃れていたが、三十分ほど走つたところにある王子製紙春日井工場は爆撃時の残骸が残り、被害の甚大さを推し測ることができた。工場は再開されている様子で、太い煙突から黒い煙が真っ直ぐ昇っていた。沿線の民家には、白壁を墨で黒く塗つてカムフラージュした跡

が残っている。後になって、竹槍による練習をして戦意を煽つたことも聞くにつけ、為政者の戦争に対する認識不足には呆れざるを得なかった。二時間半の乗車で大井駅に到着する。援護局から連絡があつたとみえて、出札口で家族や近所の人の出迎えを受け、一緒に八キロの道を歩いて我が家に戻つた。

六年ぶりに見る故郷は、笠置山は緑に包まれ、草木が優しく繁つていた。木曾川は青く澄み、平和な村落がそこに見られた。幼き子供たちの成長は著しかったが、一方、老人が何人か他界され、白木の戦死者の墓が、私たちの狭い墓地内にも幾つか建てられていた。そして、こんな寒村にも戦争による被害は確実に及んでいたことを知つた。朝に夕に、どれだけ思ったかしない故郷に立ち帰り、苦難の峠をよく乗り切つたと思ふばかりで、夢のごとくであつた。

【執筆者の紹介】

大正十一年八月二十五日、岐阜県恵那郡笠置村姫栗、父伊藤茂二、母こうさんの長男として生まれる。笠置

村（現在、恵那市笠置町）は京都府の笠置と同じ山村で、山裾の段々を積み上げたような田畑を耕して生計を立てる寒村であった。地元の小学校、県立土岐実業学校を経て、県立安八農学校（五年制）を卒業、地元の青年学校へ教員として奉職される。

昭和十八年 徴兵検査、甲種合格。

昭和十八年九月八日 現役兵として出征。

昭和十八年九月十六日 釜山より北上、黒龍江省嫩

江駅到着、満州第八八四部隊（第九七飛行場大隊）に入隊。

昭和十九年四月一日 幹部候補生試験に合格し、満

州第二航空学校に入校。

昭和二十年三月一日 蒼龍隊、対空無線独立隊の隊

長として部下二十名を指揮、航空機との連絡任務に就くも、八月十五日終戦の報と共に武装解除、

部隊全員と共に新京に集結する。

十一月十八日、帰国と信じて乗車した列車はシベリアへ、そして二年八カ月の抑留体験をすることになる。

昭和二十三年六月帰国後、約一カ年の休養期間を経

て、地元の中学校へ復職する。その後、三十二年間の教員生活を送り、多くの教え子に恵まれる。

平成五年八月、笠置中学校の教え子であった磯村源蔵、樋口要、宮地安則の三君と共にチタ市郊外シャバルトイ収容所跡を訪ね、慰霊碑を建立し、同地で死亡された戦友の供養をして帰国されたのは誠に特筆に値することであり、その指導力と三君の行動力に敬意を表します。

現在、恵那市の社会教育委員として、また、全抑協岐阜県連合会の役員として活躍されており、貴重な人材であります。

（岐阜県 鈴木善三）